

ヒロシマ音楽譜

作品が紡ぐ復興

①

ヒロシマは音楽家を駆け立ててきた。生まれた作品の多くは、惨劇の向こうに、復興をみていた。音楽に何ができたか、それは東日本大震災が突きつけた問いでもあった。クラシック、歌曲、ジャズ…。ヒロシマの復興と共に歩んだ音楽作品を今、たどりたい。

(広島大特任助教・能登原由美)

ヒロシマを音に託した ドイツとの戦争で荒廃音楽家は数多いが、歌詞し、自らも戦地に赴いたのな器楽作品となると アールトネン。原爆投下

エルツキ・アールトネン

意外に少ない。その器楽作品でいち早くヒロシマを表現したのが、実は海外の作曲家であったことを存じだろうか。フィンランドのエルツキ・アールトネン(1910〜90年)である。

彼の交響曲第2番「H IROSHIMA」は、被爆からわずか4年後の1949年に作曲され、その年にヘルシンキで初演された。故国がロシア、

のとはら・ゆみ 1971年広島市西区生まれ。広島大学院博士課程修了。専門はイギリス音楽史。「ヒロシマと音楽」委員長。

の知らせを聞いて即座にて、投下の瞬間を思わせ作曲を思い立った背景に、爆発音。わずかに残った音の世界に葬送のメロディーが静かに鳴り響く。

筆者は今年3月、ヘルシンキでアールトネンの遺族に会い、初演時の録音を聴いた。8月6日を予感させる陰鬱な冒頭。一転して広がる穏やかなメロディーは、惨劇前の広島を表しているのだろうか。だが、軍隊のマーチに続いて冒頭のメロディーが再び現れる。そし

爆心近くで
10年後演奏極北の地
惨劇に思い

KANSAI SYMPHONY ORCHESTRA

終戦10周年記念
特別演奏会

1955年8月15日、広島市公会堂(当時)で開かれたコンサートのプログラム(広島市公文書館所蔵)の表紙。指揮者の朝比奈隆があしらわれている

広島への祈りの贈物
「ヒロシマ」特別演奏会

下の様子を音で描写する。ただし、あくまで作曲者アールトネンの想像上の世界である。想像は広島未来にまで及び、終楽章では冒頭のメロディーが長調に変わって何度も繰り返され、惨劇に立ち向かう人間の内的な力強さが表現される。

その音楽が広島に届けられたのは55年8月15日のことであった。その春に開館したばかりの広島市公会堂で昼夜2度にわたるコンサートが開催された。指揮は朝比奈隆、演奏は関西交響楽団(現大阪フィルハーモニー交響楽団)。広島出身の関西財界人の支援により、全席無料のコンサートとなる。

報道によれば、2回で5千人が詰めかけ、大成功に終わった。極北で広島を思うアールトネンのもとに、感激した聴衆から手紙が届く。それによれば、演奏直後、長い沈黙が続いた。その後、観客は総立ちになって割れんばかりの拍手を送り続けたという。

コンサートの様子を写真付きで報じた翌日の中国新聞紙面